

今、古代ギリシア・ローマ哲学を問い直す

—— こんどうともひこ

文学部哲学専攻 教授

古代ギリシア・ローマ哲学を批判的な視点から捉え直し、ヘレニズム時代から古代後期の哲学、また、後世の古典受容も視野に入れ、その多様な側面に光を当てる研究を進めています。

「哲学は古代ギリシアで始まった」「古代ギリシアが輝かしい西洋文明の礎を築いた」—— 今日、こうした前提

自体が問い直されています。古代ギリシアは哲学にとって特権的な発祥の地と言えるのか。古代ギリシア哲学はむしろ性差別や人種差別といった西洋思想の負の源泉ではなかったか、と。私自身、無邪気にその偉大さを称揚できた時代に研究していたかったと思ってしまう時もありますが、今だからこそ可能となる批判的な視点があり、研究に新たな刺激をもたらしています。

私の専門は比較的マイナーなヘレニズム時代から古代後期までの哲学であり、これまで十分に注目されてこなかった古代ギリシア・ローマ哲学の多様な側面に光を当てることに関心があります。また、後世におけるギリシア・ローマ古典の受容に関する共同研究にも携わっており、そこから「なぜ今われわれが西洋古典を学ぶのか」という問いに迫る手がかりを得たいと考えています。いずれも日本では専門的に研

究できる環境が限られており、こうした研究の受け皿となることも目指しています。

卒業研究では学生の幅広い関心に応じて指導していますが、学部の研究会ではあえて「王道」を選び、プラトンとアリストテレスおよびその研究文献を主な素材としています。この二人の哲学は、哲学史上の特別な位置づけゆえに、かえって自由に思索を展開する糸口となります。

私はもともと引っ込み思案で、一人の本を読んだり音楽を聴いたりするのが好きな人間ですが、研究を通して次第に生まれた国際的な交流を面白く感じるようになってきました。2024年4月に着任して1年が経ちましたが、慶應義塾大学の古代ギリシア・ローマ哲学研究の優れた伝統を受け継ぎつつ、学部生からポスドクまでさまざまな人が同じ研究室の一員として結びつき、さらには世界へとつながっていく—— そのような場をつくっていききたいと考えています。

古代ギリシアを現代で学ぶ

は せ が わ の ゐ み

長谷川希実君 文学部哲学専攻 4年

私たちの研究会は、古代ギリシアの哲学を専門にしており、プラトンやアリストテレスといった哲学者の著作と、その著作に関する研究者の論文を読みながら、古代ギリシアの哲学に触れつつ、それが現代でどのように研究されているかを学んでいます。

また、夏休みには「ゼミ集会」と題された、個人の研究の発表会が行われます。そこでは、院生やポスドクの方々も含め、さまざまな内容の発表を聞くことができ、質問し合ったり意見を出し合ったりして、活発な議論が行われます。私自身も、プラトンの『国家』に詳しい方からのご意見をいただくことができ、非常に学びの大きい一日となりました。



生命と創造の間にある科学

くまが いなおや
熊谷直哉

薬学部 教授

研究室を主宰して5年目を迎えます。新しい分子を生み出し続けるグループとして、「分子創成化学講座」と命名しました。新しい分子は我々のグルーブの宝です。

有機化学は、生命を構成する炭素中心の分子を扱う学問であり、生物学・医学との親和性が高いことから、薬学部には必ず有機化学系の研究室が存在します。4つの共有結合を形成できる炭素原子を基盤とすることで、構築可能な分子構造は極めて多様であり、生命体を構成するさまざまな分子部品をつくりあげています。また、有機分子を形成する化学結合は、強すぎず弱すぎない絶妙な結合エネルギー範囲にあり、秩序だった構築と分解を通じてエネルギーの授受や、成長・再生といった生命現象を可能にしています。生命を分子レベルで理解する時代となり、ライフサイエンスにおける有機化学の重要性は一層高まっています。

一方、有機化学は独立した科学としても魅力的であり、自由な発想でこの世に存在しない未到分子を創出できる創造性に満ちています。安価で豊富な原子部品から、アイデア一つで無限の付加価値を生み出せる点は、他の学問にない特長です。私たちの身の回りには

100年前には存在しなかった有機分子があふれ、それらが豊かな生活を支えています。興味深いのは、それらの多くが、応用目的ではなく研究者の純粹な好奇心から生まれていることです。

世の中には、①原石を見出すことに魅力を感じる人、②その原石を磨いて価値あるものに仕上げる人、③その輝きを社会に届けることに情熱を注ぐ人があると感じています。私は典型的な①のタイプであり、学生とともに新しい分子を設計・合成し、実在する分子として証明し、その特性を明らかにして世界に発信しています。自然界に存在していなかった特殊な構造を持つ分子が、時に予想を超える性質を示すこともあり、その発見の瞬間は何物にも代えがたい喜びです。私たちの手で創出したオリジナル分子が論文や共同研究を通じて②や③の人々へと届き、機能性分子として育っていく——そのポジティブな循環に立ち会えることが、日々の研究の大きなモチベーションとなっています。

宝作り

こうへい みき
公平実希君 薬学研究科後期博士課程3年

私たちのラボは、「宝作り」をしていると教えられてきました。世の中にはないものを自らの手で生み出せる、という醍醐味を表現したのが講座名である分子創成化学です。いかにも構造有機化学らしいキノリン3量体TriQuinolineや、炭素原子を一つも含まないヘテロ六員環アミド触媒DATB、同数の炭素原子と窒素原子を有し蛍光を発するC₄N₄等、さまざまな化合物をこのラボで創造してきました。いずれの化合物においても、その構造自体が美しいと化学を志す人々から称されることが多く、モチベーションが上がります。その構造を源泉とする分子機能が見られることも多く、実用的な側面にもわくわくして研究を進めています。

